

# モードは語る

中野 香織

## 時代映す明治のドレス

明治神宮ミュージアム（東京・渋谷）で「受け継がれし明治のドレス」展が開催中だ。明治20年（1887年）、洋装奨励の思召書を出し和装から洋装へ変えた昭憲皇太后のお召し物が鑑賞できる。メインは国際的修復チームにより復元された大礼服だ。

大礼服は外国高官含む官僚らとの接見に着る最も格式高い宮廷礼服。薔薇（ばら）柄の紋織地に金モールで立体的な刺しゅうが施される。

このドレスがなぜ歴史的な意義を持つかといえば、現存する最古の大礼服であり、明治時代の外交に絶大



「受け継がれし明治のドレス」展で披露されている大礼服©大聖寺

な影響を及ぼした服だからである。当時、日本服の女性は飾り人形のように見られていた。人形ではなく尊

### 皇太后着用の大礼服

敬される人間として見られるために、昭憲皇太后は覚悟を決めた。

肌を出して胴体を締め付ける慣れないローブデコルテを着用して外国人と接見し、公の場には夫人を伴うのが当たり前という西洋の人々と対等に交流するために、天皇とそろって姿を現した。

修復プロジェクトの過程で明らかになったことは、大礼服の仕立てや刺しゅうの多くが国内で行われていたこと。昭憲皇太后は洋装導入にあたり、国産生地の使用を推奨し、産業の振興にも貢献していた。さらに、

自ら洋装を実践することで、「女性の行動が社会の発展につながる」という考え方で持ち込んだ。衣装問題は産業や政治とも関わっていた。

十二ひとえも展示。唐衣（からぎぬ）、裳（も）、打衣（うちぎぬ）など幾重もの衣を重ねて完成する最高ランクの礼装だ。現代の目には肌を露出し体を締め付けるドレスのほうが女性を人形扱いしているように見える。服とふるまいと地位は不可分で、意味は時流で左右される。昭憲皇太后は、当時の日本の地位、女性の立場を良いと信じる方向へ変えるため「一肌脱いで」服を変えた。

復元ドレスは国を思う皇太后の愛と使命感を後世に伝えようとする人々の熱意の象徴でもある。